

# 「ありのままのわたしを生きる」ために

その後

## 第7回

## 「語りを託されること」

### 土肥いつき

京都の公立高校教員。24時間一人パレード状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

大学院に入ったはいいものの、修士論文のテーマを考えなくてはなりません。はじめは「日本のトランスジェンダースタディーズをやる」などと、今にして思えば恥ずかしくなるようなことを考えていましたが、3年生になり、ほんとうにテーマを決めなくてはならなくなりました。自分にできること、自分がやらなきゃならないことを考えた時、「小さな仲間」たちのことしかないと思いました。「小さな仲間」たちが学校生活で直面する困難は、学校がつくりだしているという、誰もがわかっていることをテーマにしようと思いました。しかし、それを明らかにするためには、どうしてもインタビューしなければなりません。かつて自分が「搾取」と考えたことをやっていいんだろうか。でも、それ以外方法はありません。そこで、トランスジェンダー生徒交流会にサポーターとして参加してくれている10人の若者にインタビューを頼みました。すると、全員快く引き受けてくれました。みなさんの語りを聞きながら、その重さに気が引き締まる思いでした。と同時に、自認する性別での学校生活を実現した人の「すごさ」もわかりました。みなさんから託された語りは、必ず形にしなくちゃならないと思いました。

保育園から中学校にかけての語りの中には、先に書いた「問い」への手がかりがたくさんありました。さらに、高校入学後の語りはバラエティに富んでました。例えば、10人の中には高校を退学した人もいました。やはり「退学するに至った本人の思い」に焦点化したくなるのですが、わたしはインタビュー어의語りから見える学校の中にある制度や教員のありように焦点をあてようと思いました。また、高校在学時代に自認する性別の制服の着用を認められた人もいました。ちなみに、インタビューを引き受けてくれた人たちが高校に在学していたのは2010年に文部科学省が事務連絡を出す前です。ついつい、教員の受けとめや学校体制に焦点化したくなるのですが、わたしは自認する性別の制服着用を実現するためにおこなったインタビュー어의実践についての語りに焦点をあてました。な

ぜなら、トランスジェンダー生徒は、学校から一方的に配慮を受ける存在ではないと考えたからです。これらをまとめて2015年に修士論文を出し、京都教育大学の修士課程を終えました。

そして、大阪府立大学の博士後期課程に入学しました。入学してすぐに修士論文をリメイクしたものを学会誌に投稿しました。掲載誌の抜き刷りをインタビューーのみなさんに渡すと「そういうことだったのかー」、「なぜだったのかわかった」という反応をされました。もしかしたらみなさんの自分史の中にあつた「謎」にひとつの答えを出せたのかもしれないと思うと、少しホッとしました。

次の論文でどうしてもやりたかったのは、修士論文の時のインタビューで「特にカミングアウトしなかった」と言いながらも、高校時代に自認する性別へとまわりの扱いが変化していったと語ったAさんのことでした。いったいどんなふうになればそんなことが可能になるのかと思い、2017年に追加インタビューをしました。当日Aさんは過去のことを思いだしたメモをつくってインタビューに答えてくれました。インタビューが終わった時、Aさんは「わたしの学生時代を見事に成仏させてください」と言われました。Aさんのこの言葉にこたえたい、そしてAさんの実践をいろいろな人に知ってもらいたいと思い、Aさんのライフストーリーを元に書いた論文を学会誌に投稿し、2年弱かけてリライトした末、掲載されました。

そしてこれらの論文をもとに、2021年2月、博士後期課程6年目ようやく博士論文を提出しました。博士論文の公聴会では、たくさんコメントをもらいました。その中には厳しいものもたくさんありました。修士論文の時に感じた達成感はまったくと言っていいほどありませんでした。きっとそれは、研究ははじまったばかりということを感じたからなんだと思います。「小さな仲間」たちが過ごしやすい学校をつくるために、研究という形でどのように貢献できるのか、それが今のわたしの課題です。